

宝塚歌劇団の「エリザベートー愛と死の輪舞」:永遠の魅力を紐解く

I. 宝塚歌劇における「エリザベートー愛と死の輪舞」の揺るぎない魅力

A. 作品の重要性序論

ミュージカル「エリザベート」は、ミハエル・クンツェ氏の脚本・歌詞、シルヴェスター・リーヴァイ氏の音楽によって生み出されたウィーン発の作品である¹。日本においては、1996年に宝塚歌劇団によって初演されて以来、その壮麗な世界観とドラマティックな物語、そして珠玉の楽曲群によって、観客を魅了し続けている¹。宝塚歌劇を代表する演目の一つとして確固たる地位を築き、繰り返し再演され、多くのトップスターたちの代表作ともなってきた³。特筆すべきは、宝塚歌劇団が東宝版に先駆けて「エリザベート」を日本に紹介したという点である⁵。¹の記述によれば、「日本では1996年の宝塚歌劇団による初演に続き、2000年に東宝版が上演され、現在でも再演が繰り返されている」。これは、宝塚歌劇団の先駆的な役割を明確に示している。

宝塚歌劇団による「エリザベート」の上演は、単に海外ミュージカルを輸入したという以上の文化的な意義を持っていた。それは、作品のテーマや登場人物を、日本特有の、そして宝塚独特の演劇様式へと翻訳し、適応させる試みであった。言語の翻訳に留まらず、文化的な、そして演劇的な再解釈が求められたのである。例えば、全員女性キャストであること、男役スターシステムといった宝塚ならではの慣習に適合させつつ、日本の観客の心に響く作品へと昇華させる必要があった。この大胆かつ巧みな翻案の成功は、その後の日本におけるヨーロッパミュージカルの受容と発展に大きな影響を与えたと言えるだろう。この観点から、宝塚歌劇団は単なる上演団体としてだけでなく、日本のミュージカル市場の形成に寄与した影響力のある存在として評価されるべきである。

II. 批評家の称賛と主題の深淵:概観

A. 一般的なレビューと評判

宝塚歌劇の「エリザベート」は、ファンから絶大な支持を得ており、しばしば最も好きな作品、あるいは「必見」の演目として挙げられる⁷。公演は常に完売状態であり、観客は音楽や物語に深く精通している⁴。⁷に見られる観客の熱烈な感想は、作品との強い結びつきを示している。

専門家の間でも、作品の力強さと人気は広く認識されている。ただし、特に他のバージョンと比較する際には、宝塚の各組やキャストによって歌唱表現や役の解釈に差異が見られるとの指摘もある⁹。⁴や³²に引用されるようなプロの劇評家は、確立された枠組みの中での個々の演技のニュアンスに注目することが多い。⁸にある1996年雪組DVDのAmazonレビューには、「多くのお客様がこの作品の芸術性を高く評価しています...素晴らしい作品で...何度でも見たい作品だと感じています」とあり、これは観客からの強い肯定的な感情を例証している。

「エリザベート」という現象は、単なるミュージカル鑑賞を超えた、ファンにとっての共有体験と

なっている。常に満席の客席と、楽曲への深い理解⁴は、この作品がファン共同体にとって特別な意味を持つことを示唆している。異なるバージョンやキャストの公演を繰り返し観劇することは、ファンが多角的に作品と関わり、解釈を比較し、お気に入りの演者を称賛する手段となる。これにより、ファンダム内での豊かで継続的な対話が生まれるのである。この作品の象徴的な役柄を持つ構造は、このような繰り返しのエンゲージメントを促し、新しいキャストや再演を常に期待されるイベントへと押し上げている。

B. 音楽的風景：シルヴェスター・リーヴァイ氏の楽曲

「エリザベート」の音楽は、その成功の主要な柱の一つとして、圧倒的な称賛を受けている。「全楽曲が圧倒的にキャッチーで、たった一度聴いただけで旋律が耳に残る」と評され¹²、その魅力は広く認められている。リーヴァイ氏の作曲は、「登場人物の心情そのものを音に変換したかのよう。華やかなのに哀しく、強くて脆い」と描写され¹²、この感情的な深みが、ミュージカルの訴求力の核心を成している。

音楽はまた、物語のテーマ性を強化する上で重要な役割を担っている。特に「リプライズ」という音楽的効果は、「自由の追求」という作品全体を通底するテーマを観客に強く印象付けるために巧みに用いられている¹。例えば、「愛と死のテーマ」は、歌う人物や心情の変化に応じて調性を変えながらも、トートとエリザベートの出会いからエピローグまで一貫して同じフレーズが繰り返されることで、トートとフランツからエリザベートへ向けた不変の愛と、死の影響力の広がり表現している¹。¹では、「本研究では...作品全体を通したテーマである『自由の追求』が楽曲に強く印象付けられていることを読み取っている」と述べられている。

このように、リーヴァイ氏の音楽は単なる伴奏ではなく、物語を積極的に駆動する力を持っている。そのキャッチーさは記憶に残りやすさを保証する一方で、リプライズやテーマの巧妙な展開¹は、エリザベートが生涯をかけて追い求めた自己決定のような、複雑な感情の旅路や哲学的な思索を伝えることを可能にしている。「愛と死」といったテーマが音楽的に織り交ぜられる手法は、物語に直接的に奉仕する高度な作曲技術を示している。その結果、楽曲は即座に魅力的であると同時に構造的に複雑であるため、長年にわたる人気と、観客が新たな発見を求めて繰り返し鑑賞・聴取する意欲を支えている。

C. 演出と舞台装置（宝塚では主に小池修一郎氏）

宝塚歌劇団（および後の東宝）の「エリザベート」の翻案・演出を手掛けた小池修一郎氏は、日本の観客に向けてこの作品を形作る上で極めて重要な役割を果たしてきた¹³。小池氏はウィーン版のオリジナルから大幅な変更を加え、特に宝塚のトップスターシステムに合わせてトートをより際立った、しばしばロマンティックな主役へと昇華させた²。これには、宝塚版のために特別に書き下ろされた楽曲「愛と死の輪舞」の追加も含まれる²。

小池氏は、多くの俳優によって演じられてきた役柄について、単なる模倣に終わらせず、新鮮な解釈を促すことの難しさを語っている¹³。宝塚のプロダクションは、その豪華な衣装と壮大な

舞台装置で知られており、「エリザベート」も例外ではない。衣装デザインは、シルエットや素材、舞台照明下での見え方など、登場人物の性格や時代背景を定義する上で決定的な役割を果たしている¹⁷。¹³で小池氏は、「演出家の仕事としては、役に対するモチベーションとか解釈とかで、気持ちをどう持たせることができるか考えます...本人がいかにか新しいものとして取り組み、生まれ変わらせることができるかですから、そこに至らせるのが僕の役目だと思います」と述べている。

この「小池タッチ」とも言える演出アプローチは、原作の核を尊重しつつも、宝塚という特異な文脈に合わせて大胆に翻案する複雑な道筋を辿っている⁵。模倣に陥らない演技を重視する姿勢¹³は、宝塚の新たなプロダクションが、ファンが期待する「エリザベート」体験を提供しつつも、何か新鮮なものを提示しなければならないという理解を示唆している。これは単にキャスティングだけでなく、俳優たちが象徴的な役柄の中で自身の真実を見出すよう導くことも含意する。この演出アプローチが、宝塚のレパートリーにおける「エリザベート」の継続的な活力の源泉となっている。長年にわたり小池氏の演出に帰せられる一貫した「エネルギー」と「鋭さ」¹⁴は、このダイナミックなアプローチの証左である。

III. 宝塚歌劇における「エリザベート」上演の系譜: 多様な解釈のタペストリー

A. 宝塚における上演史概観

「エリザベート」は、1996年の初演以来、雪組、星組、宙組、花組、月組といった宝塚歌劇団の各組によって繰り返し上演されてきた³。それぞれのプロダクションは、異なるトップスターと助演陣を擁し、それによって多様な解釈が生み出されてきた。特にトート役は、男役にとって垂涎の的であり、各々の解釈がファンによって熱心に期待され、吟味される対象となっている。

表1: 宝塚歌劇「エリザベート」歴代主要キャスト一覧

上演年	組	トート	エリザベート	フランツ・ヨーゼフ	ルイジ・ルキーニ	ルドルフ
1996年	雪組	一路真輝	花總まり	高嶺ふぶき	轟悠	香寿たつき、和央ようか
1996年	星組	麻路さき	白城あやか	稔幸	紫吹淳	絵麻緒ゆう
1998年	宙組	姿月あさと	花總まり	和央ようか	湖月わたる	朝海ひかる、樹里咲穂

2002年	花組	春野寿美礼	大鳥れい	樹里咲穂	瀬奈じゅん	彩吹真央
2005年	月組	彩輝直	瀬奈じゅん	初風緑	霧矢大夢	大空祐飛
2007年	雪組	水夏希	白羽ゆり	彩吹真央	音月桂	凰稀かなめ
2009年	月組	瀬奈じゅん	凧七瑠海 (宙組)	霧矢大夢	龍真咲	遼河はる ひ、青樹 泉、明日海 りお
2014年	花組	明日海りお	蘭乃はな	北翔海莉	望海風斗	芹香斗亜、 柚香光
2016年	宙組	朝夏まなと	実咲凜音	真風涼帆	愛月ひかる	澄輝さや と、蒼羽り く、桜木み なと
2018年	月組	珠城りょう	愛希れいか	美弥るりか	月城かなと	暁千星、風 間柚乃

(出典:³⁾)

B. 主要な宝塚プロダクションの詳細レビュー

1. 1996年雪組(初演)

- キャスト: 一路真輝(トート)、花總まり(エリザベート)、高嶺ふぶき(フランツ)、轟悠(ルキーニ)³。
- 評価: 日本における「エリザベート」上演の幕開けを飾ったプロダクションとして高く評価されている⁸。花總まりのエリザベートは「圧倒的に美しい」と称賛され、香寿たつきのルドルフも注目された⁸。一路真輝のトートは多くのファンにとって象徴的な存在となったが、あるレビューではオーケストラとのリズムのずれが指摘された⁸。花總まりが登場する鏡の間のシーンは、その美しさで特に記憶に残っている¹⁸。⁸には「初演ならではの苦労があったようですが、その結果ここから日本のエリザベートの歴史が始まったんだと思うと感慨深いです」との記述がある。
- 初演の重圧と成功: 1996年の雪組は、複雑でダークなテーマを持つヨーロッパミュージカルを、それまで異なる慣習で知られていた宝塚の舞台に初めて紹介するという大きなプレッシャーに直面した。資料によれば、彼らは概ね成功を収め、一路のトート、花總のエリザベートといった、その後の基準となる主要な役柄解釈を確立した。「初演ならではの苦

労」⁸には、おそらく資料の翻案、新しいスタイルでのキャストの訓練、観客の反応の測定などが含まれていたであろう。この初演の成功は決して保証されたものではなく、その肯定的な評価が宝塚における「エリザベート」の存続可能性を固め、その後のプロダクションの高い基準を設定した。また、これにより花總まりは決定的なエリザベート役者としての地位を確立し、彼女はこの役を再演することになる。

2. 1996年星組

- キャスト: 麻路さき(トート)、白城あやか(エリザベート)、稔幸(フランツ)、紫吹淳(ルキーニ)³。
- 評価: 麻路さきのトートは「雰囲気と格好良さ」で称賛されたが、「歌唱は正直いまいち」との声もあった¹⁰。白城あやかのエリザベートは「綺麗で、強いだけのエリザベートではない」と見なされ、共感と呼んだ¹⁰。助演陣も強力で、物語に深みを与えたと評された¹⁰。しかし、別のレビューでは、白城あやかのシシィは花總まりと比較して「迫力に欠け」、衣装も見劣りしたとされた¹¹。¹⁰では、「エリザベートの世界観を堪能したい方にはお勧めです」と、歌唱重視の好みとは対照的な評価がなされている。
- 即座の継承と個性の課題: 初演直後に異なる組で「エリザベート」を上演することは、比較されながらも独自の解釈を確立するという課題を提示した。例えば、麻路さきのトートは、歌唱力よりも視覚的な存在感で注目され¹⁰、一路真輝とは異なる重点が置かれた。白城あやかは花總まりと直接比較され、その演技のインパクトについては意見が分かれた¹⁰。これは、宝塚の異なる組が同じ題材に取り組むことで、トップスターやアンサンブルの特定の強みやスタイルによって多様な解釈が生まれることを示している。また、ファンの期待や比較がいかに迅速に形成されるかも示している。

3. 1998年宙組

- キャスト: 姿月あさと(トート)、花總まり(エリザベート、再演)、和央ようか(フランツ)、湖月わたる(ルキーニ)³。
- 評価: 姿月あさとのトートは、その卓越した歌唱力(「歌が凄い」「歌唱力抜群」)で絶賛された¹⁹。花總まりのエリザベートも引き続き、その気品と感情の深みで称賛された²⁰。このプロダクションは全体として非常に強力なキャストを擁し、多くの未来のトップスターが出演していた²⁰。演出にはいくつかの「斬新」な要素が指摘されたが、ある批評家は結末が「あまりにも宝塚的」だと感じた²¹。²⁰には、「歌唱力抜群の姿月さん、やはりすごかった。『最後のダンス』の熱唱では、力が入ってしまうほど、気がつくと拳を作って聴き入っていましたね」という熱烈的なコメントがある。
- 歌唱力による「エリザベート」伝説の確立: 1998年の宙組プロダクションは、特に姿月あさとの歌唱力に優れたトートと、既に定評のあった花總まりのエリザベートによって、「エリザベート」の超大作としての地位を確固たるものにしたように思われる。「歌の上手い方が多く、聴き応え充分」²⁰という評価は、このプロダクションがドラマと音楽の両面で高い水準を達成し、トート役の新たな歌唱基準を打ち立てた可能性を示唆している。このプロダクションは「エリザベート」の魅力をさらに広げ、宝塚の中で卓越した歌唱力を披露する場と

なり得ることを示し、レパートリーにおけるその地位をさらに強固なものにした。花總まりが役を再演したことも、継続性と卓越性の感覚を生み出した。

4. 2002年花組

- キャスト: 春野寿美礼(トート)、大鳥れい(エリザベート)、樹里咲穂(フランツ)、瀬奈じゅん(ルキーニ)³。
- 評価: 春野寿美礼のトートは「圧倒的な歌唱力」と威厳ある存在感で称賛された²²。大鳥れいのエリザベートは成熟しており、特に第二幕で効果的だったが、若々しい第一幕にはやや不向きだったかもしれないと評された²³。このプロダクションは、雪組初演の「やや暗い雰囲気」と比較して「明るく煌びやか」と見なされた²²。樹里咲穂のフランツには一部批判的な意見もあった²³。²²には、「華やかさが欲しい方には、花組が良いです。主要キャストが粒ぞろいで、雪組に肩を並べる歌・演技を披露していますし、組のカラーもあるので、明るく煌びやかです」との記述がある。
- 組カラーと進化する解釈: 2002年花組と1996年雪組の比較²²は、「組カラー」という概念、つまり宝塚の5つの組がそれぞれ異なるスタイルと雰囲気を持つという考え方を浮き彫りにする。花組の「エリザベート」が「より明るい」と認識されたことは、意図的なトーンの変化、あるいはその組の一般的な演技スタイルと特定のキャストの強みが自然に生み出した結果を示唆している。これは、「エリザベート」がその暗いテーマにもかかわらず適応性があり、演じる組の特定の特性によって変化し、観客に同じ核となる素材の多様な体験を提供できることを示している。

5. 2005年月組

- キャスト: 彩輝直(トート)、瀬奈じゅん(エリザベート - ルキーニ役からの注目すべき転身)、初風緑(フランツ)、霧矢大夢(ルキーニ)³。
- 評価: このプロダクションは「エリザベートの歴史の中でもかなり『異端』」と評されている²⁴。彩輝直のトートは、気を散らす「ちりめんビブラート」で批判された²⁴。以前ルキーニを演じた瀬奈じゅんのエリザベート役は「大胆な一手」であったが、特に体格や声質に関して女性役にふさわしいかという点で賛否両論を呼んだが、一部には「妙に色っぽい」と感じる向きもあった²⁴。霧矢大夢のルキーニは「軽妙だがやはりチンピラ風」と見なされた²⁴。²⁵のレビューでは、瀬奈じゅんのエリザベートを歌唱と所作の悪さから「最悪」と断じている。²⁴には、「映像で見ると、『これじゃない感』が半端ない!!! ...サエトートの『ちりめんビブラート』...いちいち気になって歌に集中できない!」という辛辣なコメントがある。
- 型破りなキャスティングのリスク: 2005年月組プロダクション、特に確立された男役である瀬奈じゅんがエリザベートを演じたことは、重要なキャスティング実験であった。宝塚はジェンダーを越えた演技で成り立っているが、エリザベートのような象徴的な女性主役を著名な男役が演じることは、これらのレビューによれば、必ずしも成功しなかった逸脱であった。批判は歌唱力と、男役の体格が女性役にそぐわないという認識に集中した²⁴。このバージョンは、宝塚の柔軟な慣習の中でさえ、キャスティングの境界を押し広げることの挑戦と潜在的な落とし穴を示している。多才さが評価される一方で、象徴的な役柄に対

する観客の期待、そしてそれらの役柄の特定の要求(声域、女性らしさ/男性らしさの描写)がいかに強いかを浮き彫りにしている。

6. 2007年雪組

- キャスト: 水夏希(トート)、白羽ゆり(エリザベート)、彩吹真央(フランツ)、音月桂(ルキーニ)³。
- 評価: 水夏希のトートは、歌唱力は弱いとされながらも、その美しい、妖艶な存在感、特に手の動きや視線で称賛された²⁶。白羽ゆりのエリザベートは、それまでのトップ娘役としての経験が活かした壮麗なタイトルロールと見なされ、威厳ある存在感と力強い歌唱を披露した²⁶。音月桂のルキーニは「演技、歌共に抜群の安定感」と評された²⁶。未来優希のゾフィーは力強いと描写された²⁶。²⁶には、「水さんのトート、かなり好きです...歌唱力は弱いなあって思っていました、あの切れ長な目つき、所作、そして手の使い方が凄く美しいんです。ちょっとした手の仕草が妖艶さを出しています」とのコメントがある。
- 存在感と経験豊かな解釈の力: 水夏希のトートは、姿月あさとや春野寿美礼のような歌唱力の持ち主ではなかったかもしれないが、純粋な舞台上の存在感、身体性、そして「妖艶な」魅力で観客を魅了した²⁶。これは、宝塚においてトートの役作りが、歌唱力だけでなく様々な手段で成功し得ることを示唆している。白羽ゆりのエリザベート役での成功は、彼女の経験に帰せられており²⁶、これらの要求の厳しい役柄における経験豊富な演者の価値を強調している。このプロダクションは、成功した宝塚の公演の多面的な性質を示している。歌唱は重要だが、説得力のある身体的解釈、カリスマ性、そしてトップスターの「オーラ」は、特にトートのような神秘性に依存する役柄にとって、同様に、あるいはそれ以上に影響力を持つことがある。

7. 2009年月組

- キャスト: 瀬奈じゅん(トート - 男役に戻る)、風七瑠海(エリザベート - 男役がエリザベート役)、霧矢大夢(フランツ)、龍真咲(ルキーニ)³。
- 評価: 瀬奈じゅんのトートは「カッコよくて、綺麗で、艶やか」と評され、特に「最後のダンス」での歌唱は驚くほど力強く、感情豊かであった²⁷。風七瑠海のエリザベート(男役が演じる)は、花總まりの初演を彷彿とさせる、必死の生存競争を伝えるものと見なされたが、他組から男役を起用する必要性については疑問の声も上がった²⁷。龍真咲のルキーニは、細やかな演技と力強い歌唱で称賛された²⁷。あるレビューでは、結末が主役二人が「相思相愛に成就していない感じ」であり、典型的な宝塚版エリザベートの結末とは異なると感じられた²⁷。この公演の新人公演では、若き日の明日海りおのトートが高く評価された(研7)²⁸。²⁷には、「瀬奈さんは単純な俺様オーラー辺倒と思っていたのですが、全く逆で、最後まで瞳が濡れて哀感を帯びた感じ。男役の集大成」との記述がある。
- 再起とさらなるキャスティングの実験: 瀬奈じゅんが今度はトート役で「エリザベート」に戻ってきたことは、レビューで感情の深さと歌唱力の向上が称賛され、成功を収めたように見える²⁷。これは、2005年にエリザベート役で受けた批判とは対照的である。別の男役である風七瑠海をエリザベート役に起用したことは、キャスティングの実験を継続した

が、その合理性については疑問が呈された²⁷。結末の曖昧さについての言及²⁷は、宝塚の中でさえ、より型破りな解釈を探究する意欲を示唆している。このプロダクションは、スターが作品や役柄との関係を再定義する能力を示している。また、宝塚が「エリザベート」の主要な役柄について、時に物議を醸しながらも、ジェンダーや組を越えたキャスティングを継続的に試み、プロダクションをダイナミックに保っていることを示している。

8. 2014年花組

- キャスト: 明日海りお(トート)、蘭乃はな(エリザベート)、北翔海莉(フランツ、特別出演)、望海風斗(ルキーニ)³。
- 評価: 明日海りおのトートは、容姿、声、表情、動きの全てにおいて「とにかく美しい」と絶賛された²⁹。蘭乃はなのエリザベートは、特に後半にかけて著しく向上し、「私だけに」での力強い歌唱や、ルドルフの死後の悲しみを表現する説得力のある演技が注目された³⁰。北翔海莉のフランツは優しく包み込むような歌声で、望海風斗のルキーニは力強い歌唱で称賛された²⁹。このプロダクションは「宝塚初心者でも楽しめる名作」と評された²⁹。²⁹には、「明日海りおさんのトートがとにかく美しいです。歌うま望海風斗さんのルキーニ、包み込むようなやさしい歌声の北翔海莉のフランツと目でも耳でも楽しめる作品だと思います」とのコメントがある。
- 「視覚的に完璧な」エリザベートとスターパワー: 明日海りおのトートとしての「美しさ」²⁹への圧倒的な強調は、このプロダクションがトップスターの視覚的魅力とカリスマ性を強力に活用したことを示唆している。強力な助演陣(望海風斗、北翔海莉)と好評を博したエリザベート(蘭乃はな、成長を見せた³⁰)と相まって、このバージョンは全体的に高い完成度と魅力を達成し、初心者にも親しみやすいものとなったようである。これは、特にカリスマ性があり視覚的に適したトップスターが、よく練られたキャストのプロダクションにおいて、「エリザベート」を宝塚ファンダム内外でほぼ普遍的な魅力を持つレベルにまで高め、レパートリーの至宝としての地位を強化する方法を示している。

9. 2016年宙組

- キャスト: 朝夏まなと(トート)、実咲凜音(エリザベート)、真風涼帆(フランツ)、愛月ひかる(ルキーニ)³。
- 評価: 朝夏まなとのトートは「とてもカッコ良く」、印象的な演技と歌唱、そして長いストレートの黒髪と重厚な衣装による印象的な「死神」の風貌で称賛された³¹。実咲凜音のエリザベートは、「後半のエリザベートの苦悩と孤独」の表現に秀でていると評された³²。真風涼帆のフランツは、その切ない役柄が「セクシー」と描写された³¹。新人公演のレビューでは、瑠風輝のトートの「感情爆発」と和希そらの「気味の悪い」(良い意味で)ルキーニが特筆された³³。³¹には、「朝夏まなとさんのトート役が、とてもカッコ良く、大きな目が印象的で、まさに黄泉の国の死神が実在しているようです。演技力も歌唱力もすべてが最高です」とのコメントがある。
- 「異世界的な」トートとエリザベートの内面の苦悩の強調: 朝夏まなとのトートを「長いストレートの黒髪」を持つ「死神」³¹と描写することは、トートの非人間的で死神的な性質を視

覺的に強調したことを示唆している。実咲凜音のエリザベートの晩年の苦悩の描写における強み³²は、彼女の人生の心理的な負担に焦点を当てたことを示している。これらの要素が合わさって、物語のより暗く、より悲劇的な側面に傾倒したプロダクションが生まれたのかもしれない。このプロダクションは、よりロマンチックに描かれたバージョンとは対照的に、より陰鬱または強烈的な解釈を提供し、ミュージカルの核となるテーマの多様性を示した可能性がある。

10. 2018年月組

- キャスト: 珠城りょう(トート)、愛希れいか(エリザベート – サヨナラ公演)、美弥るりか(フランツ)、月城かなと(ルキーニ)³。
- 評価: これは愛希れいかの待望の退団公演であった。彼女のエリザベートは「みずみずしくキュートな美しさと圧倒的な存在感」で称賛され、エリザベートの全生涯を鮮やかに描き出した演技と評された⁴。珠城りょうのトートは若々しくエネルギッシュで、特に「闇が広がる」ではメイクと照明によってクールで異世界的な雰囲気を出していたと描写された⁴。しかし、あるレビューでは珠城りょうはトート役にミスキャストであり、美弥るりかの方が適任だったと感じ、愛希のエリザベートは「想定内」だったと評した³⁴。月城かなとのルキーニは際立っており、明瞭な口跡と堂々とした舞台姿で称賛された⁴。憧花ゆりののゾフィーは、厳しい台詞にもかかわらず温かみを感じられると評された⁴。⁴には、「エリザベート役の愛希れいかは、サヨナラ公演にあたり...エリザベートの魂の自由に焦点を当てた愛希のぶれないアプローチが、エリザベートの一生を鮮やかに浮かび上がらせ、有終の美を飾ったと言えるでしょう」との記述がある。
- 「サヨナラ公演」の意義と残るキャスティング論争: 愛希れいかのエリザベートとしての退団公演は、間違いなく観客にとって特別な感情的共鳴を加えた⁴。このような公演は宝塚において大きなイベントである。しかし、珠城りょうのトートに対する対照的な意見⁴は、愛されるスターの退団をもってしても、トートのような中心的な役柄のキャスティング選択が、ファンの間で依然として激しい議論の対象であり、好みが分かれることを浮き彫りにしている。「エリザベート」は多くのスターにとって、特にサヨナラ公演において重要な節目となる。キャスティングに関する絶え間ない議論は、ファンがこれらのキャラクターに深く関わっており、宝塚の伝統の中でそれらを解釈することに伴う期待の高さを物語っている。

IV. 大劇場を超えて:「エリザベート」の比較考察

A. ウィーンでの創生:オリジナルドイツ語版プロダクションの理解

- 創作と初演: 音楽はシルヴェスター・リーヴァイ氏、歌詞・脚本はミヒャエル・クンツェ氏、オリジナル演出はハリー・クプファー氏。1992年、ウィーンのアン・デア・ウィーン劇場で初演された¹。
- クプファー氏の演出意図: ロマンチックに美化された「シシィ」像の「神話を破壊」し、エリザベートの生涯を「死の舞踏(Totentanz)」として描くこと³⁶。彼の演出は反自然主義的で、象徴的な要素と「状況の枠組み」を用いた³⁷。彼はエリザベートの物語を「試みられるが

迷走してしまう解放の物語であり、それは解放とは逆の結果に終わってしまう」と捉えていた³⁷。

- オリジナルのトート:「死(der Tod)」として構想され、象徴的で抽象的な存在であり、必ずしもロマンティックな主役ではなかった。脚本では「ロックスターのようなオーラを放つ魅力的な青年」と描写され、ハインリヒ・ハイネに似ている可能性も示唆された⁵。彼はエリザベートの「死への憧れ(Todessehnsucht)」の具現化であり、より広範な社会の退廃の象徴でもあった³⁷。
- 音楽とテーマ要素: オリジナルプロダクションは「死のフーガ(Todesfuge)」的な性質を持ち、「死」が遍在するテーマであった。楽曲はライトモチーフと豊かでオペラ的なスタイルを採用した。有名な「私だけに(Ich gehör nur mir)」は、エリザベートの自律への核となる渴望を確立した。
- 舞台装置と視覚: クプファー氏のプロダクションは、「沈みゆく船」(ハプスブルク帝国)を象徴する傾斜した舞台や、ルキーニのやすりを思わせる目立つ階段を利用した³⁷。衣装にはしばしばシダのような装飾が施され、冥界との繋がりを示唆した³⁶。
- 語り手／コーラスとしてのルキーニ: ルキーニは皮肉屋の語り手として機能し、第四の壁を破り、物語をエリザベート殺害を正当化する「裁判」として枠付けた²。これにより、観客に「皮肉な距離」が生まれた³⁷。³⁷には、「クプファーは、この戯曲が(ハーマンによる伝記が歴史学的に試みたように)、従来の美化された『シシィ』像を脱却せしめようとするように、エリザベトという『一人の女性の神話破壊』を試みている点に興味をひかれたという」と記されている。
- ウィーン版オリジナルの知的・象徴的核: クプファー氏指揮下のウィーン版プロダクションは、ヨーロッパの演劇的伝統、特にドイツの演出家演劇(Regietheater)に深く根ざしていた。それは歴史的神話の脱構築を目指し、象徴主義(傾斜した舞台、トートの多面的な性質)とブレヒト風の語り手(ルキーニ)を用いて、観客を純粹に感情的にではなく知的に関与させようとした³⁶。トートはロマンティックな人物というよりは、複雑で実存的な力であった。このオリジナルの意図を理解することは、特にロマンティズムとスターの魅力を優先することが多い宝塚によって行われた、日本向け翻案の範囲と性質を評価する上で極めて重要である。

B. 東宝版の解釈:「エリザベート」の日本ミュージカル界における広がり

- 初演と **последующие постановки**: 東宝版の初演は2000年で、その後数多くの再演と多様なキャストで行われてきた²。
- 主人公としてのエリザベート: しばしばトートを中心に据える宝塚版とは異なり、東宝版は一般的にエリザベートを主たる主人公として提示する²。
- トートの描写:「黄泉の帝王」でありながらも、東宝版のトートは俳優によって大きく異なり、カリスマ的で力強い(例: 山口祐一郎氏の歌唱力⁴²)ものから、より伝統的にハンサムで魅惑的(例: 城田優氏⁹)なものまでである。その解釈は一般的にウィーン版オリジナルほど抽象的ではないが、宝塚の男役トートとも区別される。
- 演出(小池修一郎氏): 小池氏は東宝版も演出し、日本のミュージカル界全体からの才能

を結集して「決定版」を創り出すことを目指した⁴³。彼は「ウィーン版とタカラヅカ版のよさを両方生かしながら、ウィーン版より幻想的で退廃的に、タカラヅカ版よりもシニカルにエゴイスティックに」仕上げることを意図した²。

- 音楽と場面の違い:
 - 宝塚版ではカットされた楽曲「HASS(憎しみ)」が東宝版には存在し、ラップのようなリズムが「ミルク」のナンバーと繋がるという、洗練された音楽劇的仕掛けが特徴である¹⁶。
 - 一部の場面は宝塚版よりも「リアル」または露骨である(例: ルキーニの台詞、フ란ツの不貞の描写、エリザベートの性病感染)⁴²。
 - トートダンサーの役割がより顕著で、宝塚の「黒天使」とは異なる振り付けがなされている⁴²。
- 衣装と舞台装置: 東宝版は独自の視覚スタイルを持ち、衣装やセットデザインは長年にわたり進化してきた。例えば、2015年のプロダクションではセットと衣装が全面的に刷新された⁴⁵。
- 批評家と観客の評価: 一般的に非常に人気があり、宝塚とは異なるファン層を持つが、重複もある。レビューはしばしば個々のスターの演技や歌唱力に焦点を当てる⁹。²には、東宝版は「ウィーン版より幻想的で退廃的に、タカラヅカ版よりもシニカルにエゴイスティックに仕上がった」との記述がある。
- 主流ミュージカル大作としての東宝版「エリザベート」: 東宝版「エリザベート」は、確立されたミュージカルスター(宝塚OG、劇団四季出身者など、様々な背景を持つ⁴³)を起用し、壮大な主流ミュージカルとしての地位を確立している。ここでの小池氏の演出は、ウィーン版の持つある種の荒々しさ(「HASS」のナンバーやより露骨なプロットポイントなど¹⁶)を取り入れつつ、エリザベートの旅路とドラマティックな対決に強い物語的焦点を当てるといふバランスを目指しているように見える。男女の俳優が伝統的な性別の役を演じることも、宝塚版とは根本的に異なる点である。東宝版は日本のより広範なミュージカル観客層に対応している。その進化、例えば大幅なデザインの刷新⁴⁶は、プロダクションを何十年にもわたって新鮮で魅力的なものに保つ努力を示しており、宝塚版の解釈とは異なるが補完的な形で、商業的な日本のミュージカルシーンの礎としての地位を固めている。

V. 異なるプリズムを通した主要登場人物: 比較キャラクター研究

A. エリザベート: 自由を追求する皇后

- ウィーン版: 「神話破壊」の対象であり、自由の追求は最終的に悲劇的で未達成に終わる³⁷。彼女的美貌は道具であり罠となる⁴⁷。
- 宝塚版: 自由を求めつつも、その描写はしばしばトップ娘役のレンズを通してフィルタリングされる。トートとの関係が中心的で、しばしばロマンチックに描かれる。彼女の「エゴイズム」は、宝塚の「清く、正しく、美しく」のモットーに合わせて和らげられることがある²。「自由の追求」は依然として重要なテーマである¹。
- 東宝版: 一般的に明確な主人公。彼女の強さ、苦しみ、内面の葛藤が強調される。花總

まり氏や愛希れいか氏(共に元宝塚)のような女優が東宝版でその解釈を披露してきた⁶。描写は宝塚版よりも「シニカルでエゴイスティック」になることがある²。

- エリザベートの変容する主体性とロマンティズム: エリザベートの自由への核となる渴望は不変だが、その枠組みは変化する。ウィーン版は、この追求の最終的な失敗と悲劇を強調する³⁷。宝塚版はしばしば彼女の抑圧との闘いを強調するが、特にトートに関して、よりロマンティックな物語の中でそれを枠付ける。東宝版は、彼女の複雑さと欠点のより直接的で、おそらく理想化されていない描写を可能にする²。エリザベートの「自由」そのものの解釈が異なる。それは政治的なものか、個人的なものか、精神的なものか? 各バージョンは異なる側面を強調し、文化的なニュアンスと演劇的な慣習を反映している。

B. トート(死): 抽象的な概念からカリスマ的な求愛者へ

- ウィーン版: 象徴的で多面的な存在 – 誘惑者、解放者、エリザベートの精神の一部、歴史的衰退の担い手⁵。従来の意味での「恋人」とは必ずしも言えない。「ロックスターのよう」でありながらも「死の欲動」を体現する⁵。
- 宝塚版: 「黄泉の帝王」へと変貌し、強力でカリスマ的、そしてしばしば明確にロマンティックな存在として、主演男役の役柄に合わせてデザインされた²。楽曲「愛と死の輪舞」はこのロマンティックな繋がりを強調するために書かれた²。その容姿は視覚的に印象的で魅力的である²。
- 東宝版: 「黄泉の帝王」だが、解釈は俳優によって大きく異なる。力強く威圧的(山口氏)な場合もあれば、より若く魅惑的(城田氏、古川氏)な場合もある⁵。ロマンティックな要素は存在するが、キャストによっては宝塚版ほど中心的ではないかもしれない。

表2: トートの描かれ方の比較分析(ウィーン版、宝塚版、東宝版)

特徴	ウィーン版	宝塚版	東宝版
主な役割/機能	象徴的、多面的(死、誘惑、解放、エリザベートの精神の一部、歴史的衰退の象徴)	黄泉の帝王、ロマンティックな主役(男役トップスター)、エリザベートの運命の相手	黄泉の帝王、エリザベートを誘惑する存在。俳優により解釈の幅が広い(力強い支配者～若く魅惑的な存在)
エリザベートとの関係	複雑、対立的、精神的繋がり、必ずしも恋愛ではない	運命的、情熱的、ロマンティックな愛憎関係が中心	恋愛要素は強いが、ウィーン版の持つ象徴性や宝塚版ほどの純粋なロマンスとも異なる多面性を持つ
視覚スタイル	「ロックスター風」、ハインリヒ・ハイネ似、時に抽象的、死神の伝統的	豪華絢爛、耽美的、男役スターの魅力を最大限に引き出すデザイン、	俳優の個性や演出コンセプトにより多様。スタイリッシュ、ダーク、時に現

	イメージからの脱却	黒を基調とした衣装が多い	代的な要素も取り入れられる
歌唱スタイル	オペラの、ドラマティック、力強い	宝塚の男役歌唱(中低音域の魅力、独特の節回し)、甘美さと力強さの共存	俳優のバックグラウンド(ミュージカル、ロック等)により多様。高い歌唱力が求められる
強調される主要曲	「最後のダンス(Der letzte Tanz)」、「闇が広がる(Die Schatten werden länger)」など	「愛と死の輪舞」、「最後のダンス」、「闇が広がる」など、トートの心情を吐露するナンバーが重視	「最後のダンス」、「闇が広がる」、「愛と死の輪舞」(日本版共通)など、ドラマティックな楽曲群

- トートの変容 – 演劇的文脈の影響: ウィーンの象徴的な「死」から宝塚のロマンティックな「黄泉の帝王」へのトートの変容は、翻案の最も顕著な例である²。この変化は、宝塚の構造的ニーズ(男役を際立たせること)と、説得力のあるロマンティックな力関係を創り出したいという願望によって推進された。東宝版はその後、これら二つの中間の空間を航行し、男性俳優によるより多様な解釈を可能にしている。これは、キャラクターの核となる性質が、異なる演劇的伝統や観客の期待に合わせて根本的に変更され、同じ原作から大きく異なる観客体験を生み出す方法を示している。「日本のトート」は、オリジナルのウィーン概念とは異なる独自の存在である。

C. フランツ・ヨーゼフ: 引き裂かれる皇帝

- ウィーン版/東宝版: よりニュアンス豊かに描かれ、義務、エリザベートへの愛、そして母親/宮廷への服従との間の内面の葛藤が示される⁹。彼の老化と疲弊はしばしば重要な要素となる。
- 宝塚版: しばしばトートの恋敵として機能する。エリザベートへの愛は明確だが、トートとエリザベートの力関係を強調するために、彼のキャラクターはやや単純化されることがある。俳優の解釈(例: 北翔海莉氏の優しい描写²⁹、美弥るりか氏の威厳ある描写⁴)が深みを加える。
- ロマンティックな焦点のバロメーターとしてのフランツ・ヨーゼフ: フランツ・ヨーゼフの描写は、しばしばプロダクションのロマンティックな重点がどこにあるかを反映する。トートとエリザベートの力関係が最重要視されるバージョン(多くは宝塚版)では、トートの魅力を増幅させるためにフランツが弱く見えたり、共感を呼びにくいように見えることがある。より歴史的または心理的なリアリズムを目指すバージョン(多くは東宝版/ウィーン版)では、彼の内面の葛藤とエリザベートへの純粋な愛がより重視される。彼のキャラクターアーク、特にエリザベートとの感動的な「夜のポート」のデュエットは、トートの存在に関わらず、彼らの失敗した結婚の悲劇を強調し、すべてのバージョンで一貫した感情的な深みを提供している。

D. ルイジ・ルキーニ: アナーキストの語り手

- ウィーン版: 直接観客に語りかけ、物語を粹付け、彼らを巻き込む、皮肉屋でブレヒト的な語り手³⁷。彼の動機は複雑で、アナーキストとしての信念に結びついている。
- 宝塚版: やはり語り手だが、その描写は様々である。時にはよりいたずら好きな司会者のようであり、時にはより暗い側面を持つ。俳優のカリスマ性が鍵となる(例: 望海風斗氏²⁹、月城かなと氏⁴⁾)。「キツチュ」のナンバーが見せ場となる。
- 東宝版: しばしば非常に強力でカリスマ的な役柄であり、高嶋政宏氏のような俳優が代表作としている⁴²。「狂気」と皮肉は、一部の宝塚版よりも顕著になることがある。
- ルキーニ – 信頼できないが必要不可欠な案内人: 物語の枠組み装置としてのルキーニの役割は極めて重要である。彼のトーン – 皮肉、狂気、非難 – が出来事に対する観客の認識を形作る。ウィーン版は「皮肉な距離」を生み出す彼の役割を強調する³⁷。宝塚版と東宝版は、彼の狂気や皮肉の度合いを変えるかもしれないが、物語の推進力および解説者としての彼の機能は変わらない。ルキーニの解釈は、プロダクション全体のトーンに大きく影響する。よりあからさまに「狂気じみた」ルキーニは物語をより主観的に感じさせるかもしれないし、より政治的に告発的なルキーニは社会歴史的な文脈を強調するかもしれない。

E. ルドルフ: 悲劇の皇太子

- ウィーン版/東宝版: 彼の物語はしばしばより詳細に描かれ、政治的フラストレーション、孤独、そして育ちの心理的影響が強調され、悲劇的な結末へと導かれる⁴⁴。トートとの「闇が広がる」での関係は、極めて重要で暗いデュエットである。
- 宝塚版: 彼の悲劇は依然として強烈であり、「闇が広がる」は主要なナンバーである。エリザベートとの繋がり(「ママ、どこなの?」)と彼の脆弱性がしばしば強調される。この役は若い男役にとって重要な役柄である。
- ハプスブルク悲劇の継承者としてのルドルフ: ルドルフの物語は、抑圧、失敗した願望、そして帝国宮廷(およびトート)の破壊的影響というテーマを反映し、強める重要なサブプロットである。母親への必死の訴えと最終的な自殺は、すべてのバージョンで一貫して強力な瞬間である。ルドルフの運命は厳しい警告として機能し、帝国の崩壊を予兆するものであり、トートとの彼の相互作用は、しばしばトートが人間界に最も直接的かつ壊滅的な介入を行う一つを表している。

VI. 結論: 揺るぎない「エリザベート」への魅惑

A. 宝塚のユニークな貢献の要約

宝塚歌劇団は、「エリザベート」を翻案するにあたり、特にトートの中心的役割とロマンティックな焦点化を通じて、この作品をユニークで愛されるイテレーションへと昇華させた。この大胆な試みは、日本におけるミュージカルの受容と人気に大きく貢献したと言えるだろう。男役スターシステムという宝塚ならではの特性を活かし、黄泉の帝王トートをエリザベートと対等、あるいは

はそれ以上の存在として描くことで、原作とは異なる新たな魅力を引き出した。

B. 普遍的なテーマと訴求力

自由、愛、死、そして抑圧との闘いといったテーマは、文化やプロダクションの違いを超えて、観客の心に響き続ける。「エリザベート」が描く、束縛された環境における個人の自由を求めるエリザベートの生き方は、「非常に今日的」であり、現代においても多くの共感を呼ぶ理由の一つである¹。彼女の苦悩と葛藤、そして自己実現への渴望は、時代を超えて普遍的な訴求力を持つ。

C. ミュージカル史における「エリザベート」の遺産

「エリザベート」は、現代ミュージカルの古典としての地位を確立し、日本のミュージカル界、そして潜在的にはそれ以外の地域にも影響を与え続けている。「エリザベート」が絶えず再演され、新しいキャストによって再解釈され、時には舞台装置や衣装も更新されるという事実（東宝版で見られるように⁴⁵）は、それが静的な作品ではないことを示している。宝塚、東宝、あるいはウィーンの再演であれ、各プロダクションはその継続的な歴史に新たな一章を加え、新しい世代がそれと繋がることを可能にしている。このミュージカルの堅固な構造、説得力のあるキャラクター、そして力強い楽曲は、継続的な芸術的探求のための肥沃な土壌を提供し、今後何年にもわたってその今日性を保証する。ユーザー自身の宝塚版への深い愛情は、この揺るぎない力の証左である。

引用文献

1. ミュージカル「エリザベート」の楽曲分析, 6月 3, 2025にアクセス、
http://www.ias.sci.waseda.ac.jp/GraduationThesis/2020_summary/1w173012-3_s.pdf
2. 卒業論文 ミュージカル『エリザベート』における死の日唄比較 - 藁谷郁美研究会 | Waragai Lab., 6月 3, 2025にアクセス、
https://ikumi.sfc.keio.ac.jp/lab_thesis/PDF/%E6%A6%8E%E6%9C%AC.pdf
3. エリザベート | 宝塚歴代キャスト, 6月 3, 2025にアクセス、
http://www.moon-light.ne.jp/musical/Elisabeth/takarazuka_cast.html
4. 愛希れいか、有終の美飾る、サヨナラ公演「エリザベート」開幕 ..., 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/takarazukakagekishikyoku/entry-12400188001.html>
5. ミュージカル『エリザベート』楽曲・時代背景を徹底解説(ウィーン版), 6月 3, 2025にアクセス、
<https://mitsisi.com/musicaelisabethexplanation/>
6. 「エリザベート」は“愛・生・熱・欲”? 育三郎「自分だからできるトート」 - ナタリー, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://natalie.mu/stage/news/355095>
7. エリザベート 25周年 ガラコンサート | ほぼ観劇ブログ, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/u-u-wanko/entry-12681045777.html>
8. Amazon.co.jp: 『エリザベート』(‘96年雪組) [DVD], 6月 3, 2025にアクセス、
<https://www.amazon.co.jp/%E3%80%8E%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88%E3%80%8F-96%E5%B9%B4%E9%9B%AA%E7%B5%84-DVD-%E5%AE%9D%E5%A1%9A%E6%AD%8C%E5%8A%87%E5%9>

[B%A3/dp/B00CZ9VNE6](#)

9. 「エリザベート」の観てきた！クチコミ一覧 | 演劇・ミュージカル等のクチコミ&チケット予約 CoRich舞台芸術！, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://stage.corich.jp/stage/62807/done?sort=update>
10. Amazon.co.jp: MASTERPIECE COLLECTION【リマスターBlu-ray版 ..., 6月 3, 2025にアクセス、
<https://www.amazon.co.jp/MASTERPIECE-COLLECTION%E3%80%90%E3%83%AA%E3%83%9E%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BCBlu-ray%E7%89%88%E3%80%91%E3%80%8E%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88-%E6%84%9B%E3%81%A8%E6%AD%BB%E3%81%AE%E8%BC%AA%E8%88%9E-%E3%80%8F-96%E5%B9%B4%E6%98%9F%E7%B5%84-%E9%B%A%BB%E8%B7%AF%E3%81%95%E3%81%8D/dp/B07G54Q2WT>
11. スカステで星組「エリザベート」を見た | ムラオの宝塚ブログ, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/zukaloverman/entry-12165561770.html>
12. ミュージカル「エリザベート」考察 | kento - note, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://note.com/kento1153/n/n0c3c2463f747>
13. トートと少女マンガ — 小池修一郎さんインタビュー(前編): 宝塚 ..., 6月 3, 2025にアクセス、
http://bbkids.cocolog-nifty.com/takarazuka/2007/04/post_f7cf.html
14. 日本のミュージカル史に燦然と輝く大ヒットミュージカル『エリザベート』合同取材会レポート, 6月 3, 2025にアクセス、
<http://enbu.co.jp/takarazuka/elisabeth/>
15. フレンチ・ミュージカルとウィーン・ミュージカルの日本受容 __『エリザベート』(1992)と『ノートルダム・ド・パリ』(1998)を例に__, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://www.students.keio.ac.jp/hy/law/class/registration/files/15%20Tsunemori.pdf>
16. ただのラッパー集団じゃない！！.....『エリザベート』に張り巡ら ..., 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/jj-ht/entry-12483461356.html>
17. Stage Side“コスチューム”で語る『エリザベートー愛と死の輪舞ー』の魅力 - 宝塚歌劇団, 6月 3, 2025にアクセス、
https://kageki.hankyu.co.jp/revue/2018/elisabeth/special_003.html
18. エリザベートー愛と死の輪舞ー (96年雪組) - 番組詳細 | 宝塚歌劇 衛星放送チャンネル | タカラヅカ・スカイ・ステージ, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://www.tca-pictures.net/skystage/Prgm/Detail/274.html>
19. MASTERPIECE COLLECTION【リマスターBlu-ray版】『エリザベート-愛と死の輪舞-』(98年宙組), 6月 3, 2025にアクセス、
<https://www.amazon.co.jp/MASTERPIECE-COLLECTION%E3%80%90%E3%83%AA%E3%83%9E%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BCBlu-ray%E7%89%88%E3%80%91%E3%80%8E%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88-%E6%84%9B%E3%81%A8%E6%AD%BB%E3%81%AE%E8%BC%AA%E8%88%9E-%E3%80%8F-98%E5%B9%B4%E5%AE%99%E7%B5%84-%E5%A7%BF%E6%9C%88%E3%81%82%E3%81%95%E3%81%A8/dp/B07G5B76JQ>
20. エリザベートー愛と死の輪舞ー (98年宙組) - 番組詳細 | 宝塚歌劇 ..., 6月 3, 2025にアクセス、
<https://www.tca-pictures.net/skystage/Prgm/Detail/276.html>
21. 公演評, 6月 3, 2025にアクセス、
<http://waiwai.ciao.jp/takarazuka/review/gekijyo.html>
22. 『エリザベート』(02年花組) [DVD]: 宝塚歌劇団, 6月 3, 2025にアクセス、

- <https://www.amazon.co.jp/%E3%80%8E%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88%E3%80%8F-02%E5%B9%B4%E8%8A%B1%E7%B5%84-DVD-%E5%AE%9D%E5%A1%9A%E6%AD%8C%E5%8A%87%E5%9B%A3/dp/B00CZBFRQ4>
23. 『エリザベート』⑥ '02年・花組・宝塚 DVD / CD「オサあさみどりのトリデンテ」| To TAKARAZUKA once a month at least—観劇・備忘録, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/hirs921/entry-12229386031.html>
 24. スカステで2005年月組「エリザベート」を見た | ムラオの宝塚ブログ, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/zukaloverman/entry-12194655935.html>
 25. 珠城りょう・愛希れいか主演: 宝塚月組「エリザベート」とオールタイム・ベスト(ワースト)・キャスト選考! - エンターテインメント日誌, 6月 3, 2025にアクセス、
<http://opera-ghost.cocolog-nifty.com/blog/2018/10/post-50e5.html>
 26. 2007年 雪組 エリザベート 観賞 | ジュニのマイペースdiary, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/polaris-love-pop/entry-11781426583.html>
 27. 2009年の思い出 ② (月組「エリザベート」の記憶), 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/3579148/entry-12677396844.html>
 28. すごい... 2009年月組『エリザベート』新公 | time-for-reflectionの今を楽しむ~, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/time-for-reflection/entry-12542959736.html>
 29. 『エリザベート—愛と死の輪舞—』[Blu-ray] - アマゾン, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://www.amazon.co.jp/%E3%80%8E%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88-%E2%80%95%E6%84%9B%E3%81%A8%E6%AD%BB%E3%81%AE%E8%BC%AA%E8%88%9E%E2%80%95%E3%80%8F-Blu-ray-%E5%AE%9D%E5%A1%9A%E6%AD%8C%E5%8A%87%E5%9B%A3/dp/B00NI1BR34Y>
 30. 2014年花組「エリザベート」を観てきました。: 夢々人生(旧宝塚 ..., 6月 3, 2025にアクセス、
<http://sizendaisuki.cocolog-nifty.com/kosumosu/2014/10/2014-35c3.html>
 31. 宙組宝塚大劇場公演 三井住友VISAカード ミュージカル『エリザベート—愛と死の輪舞—』[Blu-ray], 6月 3, 2025にアクセス、
<https://www.amazon.co.jp/%E5%AE%99%E7%B5%84%E5%AE%9D%E5%A1%9A%E5%A4%A7%E5%8A%87%E5%A0%B4%E5%85%AC%E6%BC%94-%E4%B8%89%E4%BA%95%E4%BD%8F%E5%8F%8B%E5%82%AB%E3%83%BC%E3%83%89-%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%80%8E%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88-%E2%80%95%E6%84%9B%E3%81%A8%E6%AD%BB%E3%81%AE%E8%BC%AA%E8%88%9E%E2%80%95%E3%80%8F-Blu-ray/dp/B01KGWM89M>
 32. 揺るぎない定番の香気 宝塚宙組『エリザベート〜愛と死の輪舞 ..., 6月 3, 2025にアクセス、
<https://spice.eplus.jp/articles/80274>
 33. 宙組エリザベート新人公演観てきた感想 | くらむ - note, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://note.com/asaasasan3/n/n252a4f6e5cac>
 34. 2018年月組エリザベート観劇感想 | ZUKAファン鎌子のブログ, 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/ana-ishi-gun--2022/entry-12778926484.html>
 35. Amazon.co.jp: 月組宝塚大劇場公演 三井住友VISAカード ミュージカル『エリザベート—愛と死の輪舞—』[Blu-ray], 6月 3, 2025にアクセス、
<https://www.amazon.co.jp/%E6%9C%88%E7%B5%84%E5%AE%9D%E5%A1%9A%E5%A4%A7%E5%8A%87%E5%A0%B4%E5%85%AC%E6%BC%94-%E4%B8%89%E5%8F%8B%E5%82%AB%E3%83%BC%E3%83%89-%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%80%8E%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88-%E2%80%95%E6%84%9B%E3%81%A8%E6%AD%BB%E3%81%AE%E8%BC%AA%E8%88%9E%E2%80%95%E3%80%8F-Blu-ray/dp/B01KGWM89M>

- [E4%BA%95%E4%BD%8F%E5%8F%8BVISA%E3%82%AB%E3%83%BC%E3%83%89-%E3%80%8E%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88-%E2%80%95%E6%84%9B%E3%81%A8%E6%AD%BB%E3%81%AE%E8%BC%AA%E8%88%9E%E2%80%95%E3%80%8F-Blu-ray/dp/B07HGD9G2T](https://www.jgg.jp/pluginfile.php/133/mod_book/chapter/30/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%8F%A2%E6%9B%B8155.pdf?time=1717683031541)
36. 《エリーザベト》変容Formen der Adaption des Musicals "ELISABETH", 6月 3, 2025にアクセス、
https://www.jgg.jp/pluginfile.php/133/mod_book/chapter/30/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%8F%A2%E6%9B%B8155.pdf?time=1717683031541
 37. researchmap.jp, 6月 3, 2025にアクセス、
https://researchmap.jp/maimiyake/published_papers/45958983/attachment_file.pdf
 38. エリザベート (ミュージカル) - Wikipedia, 6月 3, 2025にアクセス、
[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88_\(%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%AB%E3%83%AB\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%82%B6%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88_(%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%82%AB%E3%83%AB))
 39. ミュージカル「エリザベート」| 公演情報・キャスト・日程 - ステージナタリー, 6月 3, 2025にアクセス、<https://natalie.mu/stage/play/3625>
 40. 【動画】東宝版20周年 ミュージカル『エリザベート』2020年公演製作発表 | アイデアニュース, 6月 3, 2025にアクセス、<https://ideanews.jp/archives/84111>
 41. エリザベート | 歴代キャスト, 6月 3, 2025にアクセス、
http://www.moon-light.ne.jp/musical/Elisabeth/elisa_cast.html
 42. 東宝「エリザベート」観劇日記 (朝海ひかる・山口祐一郎) @ 帝劇 ..., 6月 3, 2025にアクセス、<https://plaza.rakuten.co.jp/gateau2006/diary/200812290000/>
 43. エリザベート変容, 6月 3, 2025にアクセス、
https://kyoritsu.repo.nii.ac.jp/record/2463/files/bungei58_9suzuki.pdf
 44. 『エリザベート』宝塚版とミュージカル版の違い その2 | To ..., 6月 3, 2025にアクセス、
<https://ameblo.jp/hirs921/entry-12204313248.html>
 45. 帝国劇場から博多座までの旅路で進化を続ける『エリザベート』上演中！ - 演劇キック, 6月 3, 2025にアクセス、<http://enbu.co.jp/kangekiyoho/elisabeth2023/>
 46. 2/2 生と死の拮抗が生む壮麗な舞台『エリザベート』[ミュージカル] All About - オールアバウト, 6月 3, 2025にアクセス、<https://allabout.co.jp/gm/gc/456590/2/>
 47. 【レポ】映画「エリザベート1878」 | たいしょーろまん - note, 6月 3, 2025にアクセス、
https://note.com/taisho_loveup/n/nc6d2cd887edc